

《研究ノート》

## 日本の若者の学校観と職業観は特異か —階層的クラスタリングによる検討—

生 駒 忍

Is there singularity on attitudes to school and occupation in the youth of Japan?:  
Hierarchical clustering research

SHINOBU IKOMA

キーワード

国際比較 (cross-country comparison), 階層的クラスター分析 (hierarchical cluster analysis), 第8回世界青年意識調査 (the Eighth World Youth Survey), 若者論 (discourses concerning the youth)

年長者が若者に対しての批判的な指摘を行うことは、エジプト中王国のころにすでにあったという話 (柳田, 1938) は、真偽はともかくとしても、人口に膾炙している。そのような指摘を行う側の誰もが、かつて若者であったことがあり、その頃と比較を行うことで、今の若者の変化について問題視したり、違和感を表明したりすることは、今に始まったことではない。最近では、車、酒、海外旅行、活字などに対しての、「若者の～離れ」(原田, 2012参照) のような形をとるものも目立つようになっていく。

一方で、若者の特性に関する、性質は似ているが異なる角度からの批判的アプローチとして、海外との比較に基づくものがある。古くから、過去と現在とを比較して、若者がこのようになっては将来が不安であるという議論があるが、否応なしのグローバル化が進んだ今日では、他国の若者に比べてこのようでは将来が不安であるという、横方向の対比から縦方向の悲観につなげるような論じ方もされる。学校内外での学習時間や留学者数のような、物理的に計数可能なものだけでなく、さまざまな社会的態度においても、日本の若者の内向き、低意識ぶりが指摘、指弾されることが珍しくない。

ただし、これらの議論においては、日本が他

国と離れている特定の指標の数値が、そのまま持ち出されることが多い。例えば、日本青少年研究所の調査結果から、「偉くなりたいと思うか」という質問に「強く思う」と答えたのは、米国30%、中国37%、韓国19%だったが、日本はわずか9% (花野, 2013) という部分がニュースになったことは、記憶に新しい。そして、日本だけが世界の傾向と異なり特殊であるかのような解釈も行われがちである。このような知見は、量的な一変数での比較であり、これで順位をつければ日本が端に来ることは確かであるが、日本の若者が他の国々とは質的、ないしは本質的に異なることを確認するわけではない。

職業観に関しては、吉本 (1996) が第6回世界青年意識調査のデータを用いた分析および考察を行っており、質的な面での議論もされていると見ることができる。そこでは、探索的因子分析により整理したことで得られた2因子による座標平面上に調査対象の11か国が配置され、その結果、“日本の若者だけが第四象限に位置” (p.32) したことに注意が向けられた。しかし、これは因子得点という相対的な量に基づくプロットであり、しかも日本はどちらの得点も絶対値で2に届かない程度で、わずかに第四

象限へと偏ったものの、ほぼ中心にいると見ることもできる。むしろ、ロシアやフィリピンのほうが、他国と大きく離れており、特異な職業観を持っていると理解されるべきであろう。

そこで本研究では、第8回世界青年意識調査のデータを用いて、日本の若者に際だった特異性が認められるかどうかを、階層的クラスタ分析により検討する。世界青年意識調査は、内閣府がほぼ5年ごとに行っている社会調査である。対象国は第5回と第6回とで一致していることを除き、調査毎に入れ替わりがあり、第6回までは11か国、第7回からは5か国が対象となっている。最新の調査である第8回は、日本、アメリカ、イギリス、フランス、韓国を調査対象としており、日本、アメリカ、韓国では2007年11月～12月に、イギリスとフランスでは2008年9月～10月に、各国とも1000人強ずつ、全て面接調査でデータ収集が行われている。本研究ではそのうち、若者論で議論的となりやすい学校観および職業観に関する部分を取り上げて、クラスタ分析の対象とする。もし、日本が他の調査対象国とはまともならず、孤立性が高いことが示されれば、わが国の青年の意識が諸外国に比べて特異であることを支持する証拠となろう。

## 方 法

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）が公表している、第8回世界青年意識調査のデータを分析対象とした。以前の調査と異なり、第8回については調査結果の冊子体での公刊がされおらず、内閣府ウェブサイトに掲載された調査結果が公表されている全てであり、これを分析に用いた。

調査は全55問からなるが、本研究での関心に沿う第8問（学校に通う意義）、第9問（社会で成功する要因）、第20問（職業選択の重視点）の3問を取り上げた。いずれも、提示された項目群へ複数回答で選択を行う設問であり、同じ領域に関して高次元空間をとったクラ

スタ分析が可能となる。ただし、異質かつ該当率の低い項目は、分析対象から外した。そのため、第8問では「特に意義はない」と「わからない・無回答」、第9問では「わからない・無回答」、第20問では「その他」と「わからない・無回答」が、それぞれ分析から除外された。公表されているデータは百分率で表記されているため、これを選択率へ戻した上で分析を行った。

クラスタ分析は、統計ソフトウェアRのhclust関数によって行われた。いずれの分析にも、凝集型の階層的手法として広く用いられるウォード法を適用し、デンドログラムを得た。

## 結 果

得られたデンドログラムを図1～図3に示す。図1は第8問、図2は第9問、図3は第20問について得られたものである。

日本は、第8問ではアメリカおよびイギリスに、第9問ではフランスに近い位置にあり、わが国だけが特異であるといえる結果とはなっていない。第20問では、日本は他4か国とはやや離れ気味であることがうかがえるが、韓国およびフランスと同じクラスターに属するという解釈も成立する結果である。そして、得られた3種のデンドログラムの間には、明瞭な一貫性を認めることは難しい。

## 考 察

本研究では、第8回世界青年意識調査における学校観および職業観のデータに対し、階層的クラスタ分析を適用し、調査対象の5か国の間での類似性を検討した。得られたデンドログラムは、日本だけが他4か国から隔絶されていたり、他の国々が一貫したパターンを示していたりするものではなかった。よって、日本の青年がとりわけ特異な特徴を持っていることを示すような知見は得られなかったとすることができる。

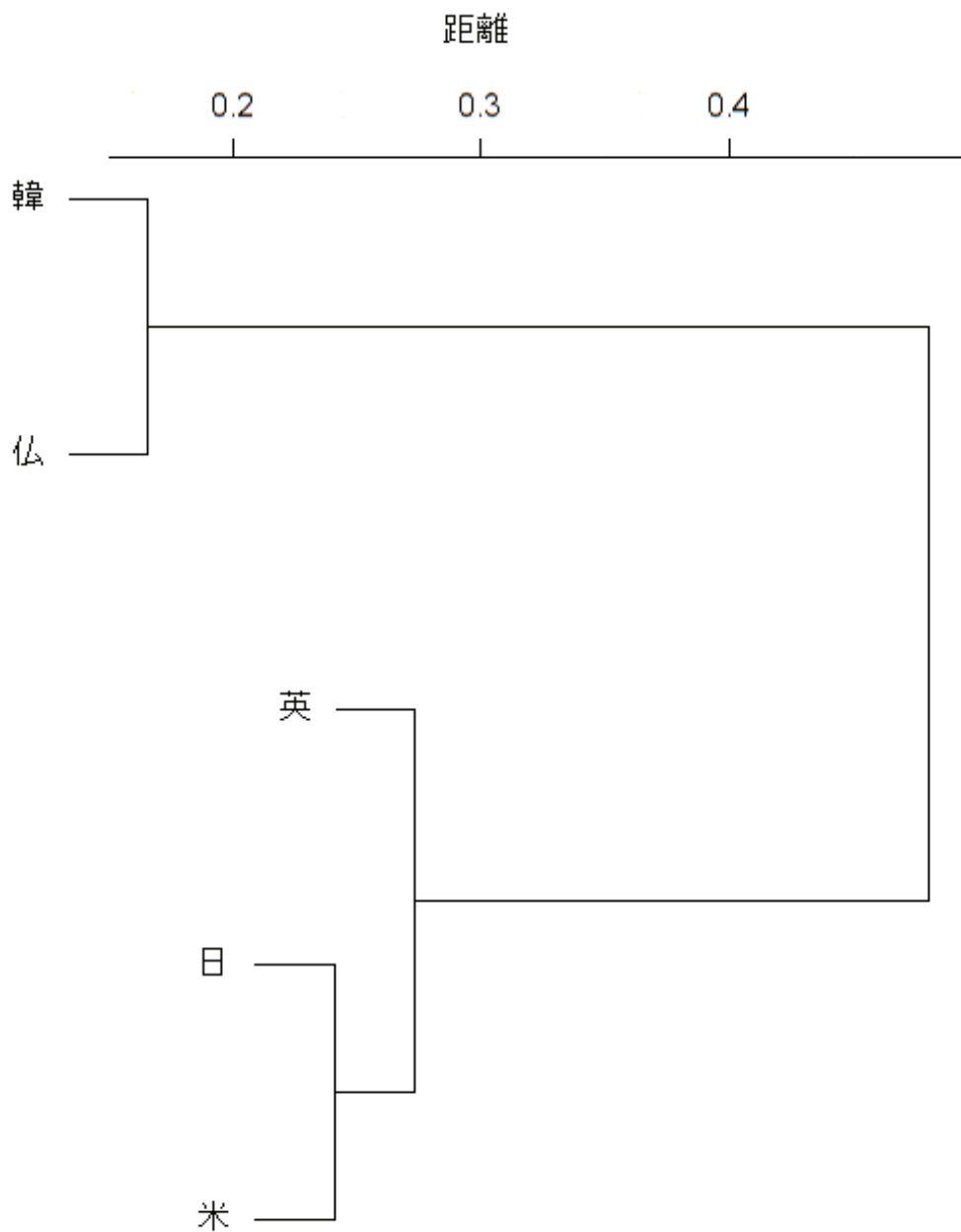


図1 第8問（学校に通う意義）の5か国回答に対するクラスター分析によるデンドログラム

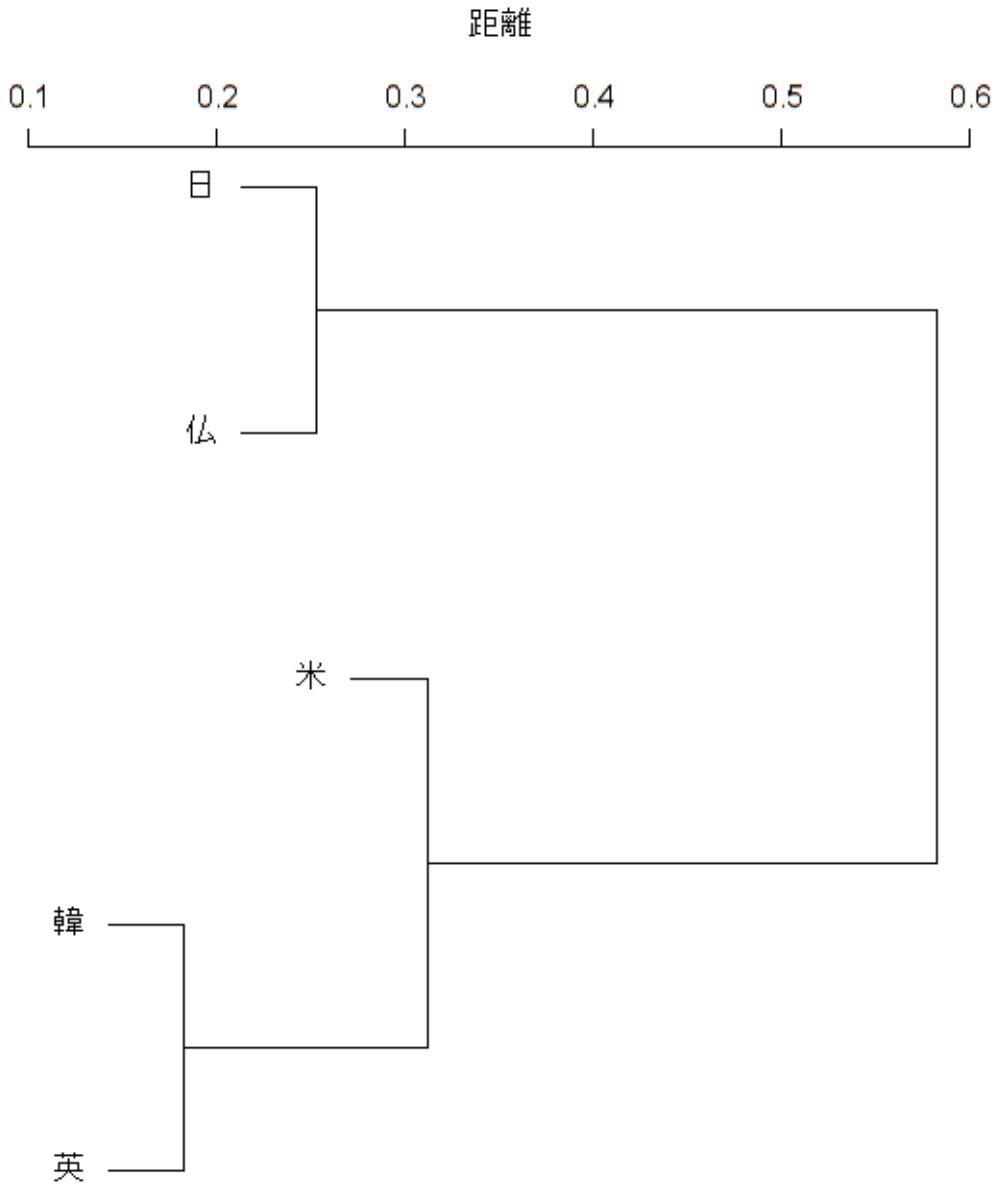


図2 第9問（社会で成功する要因）の5か国回答に対するクラスター分析によるデンドログラム

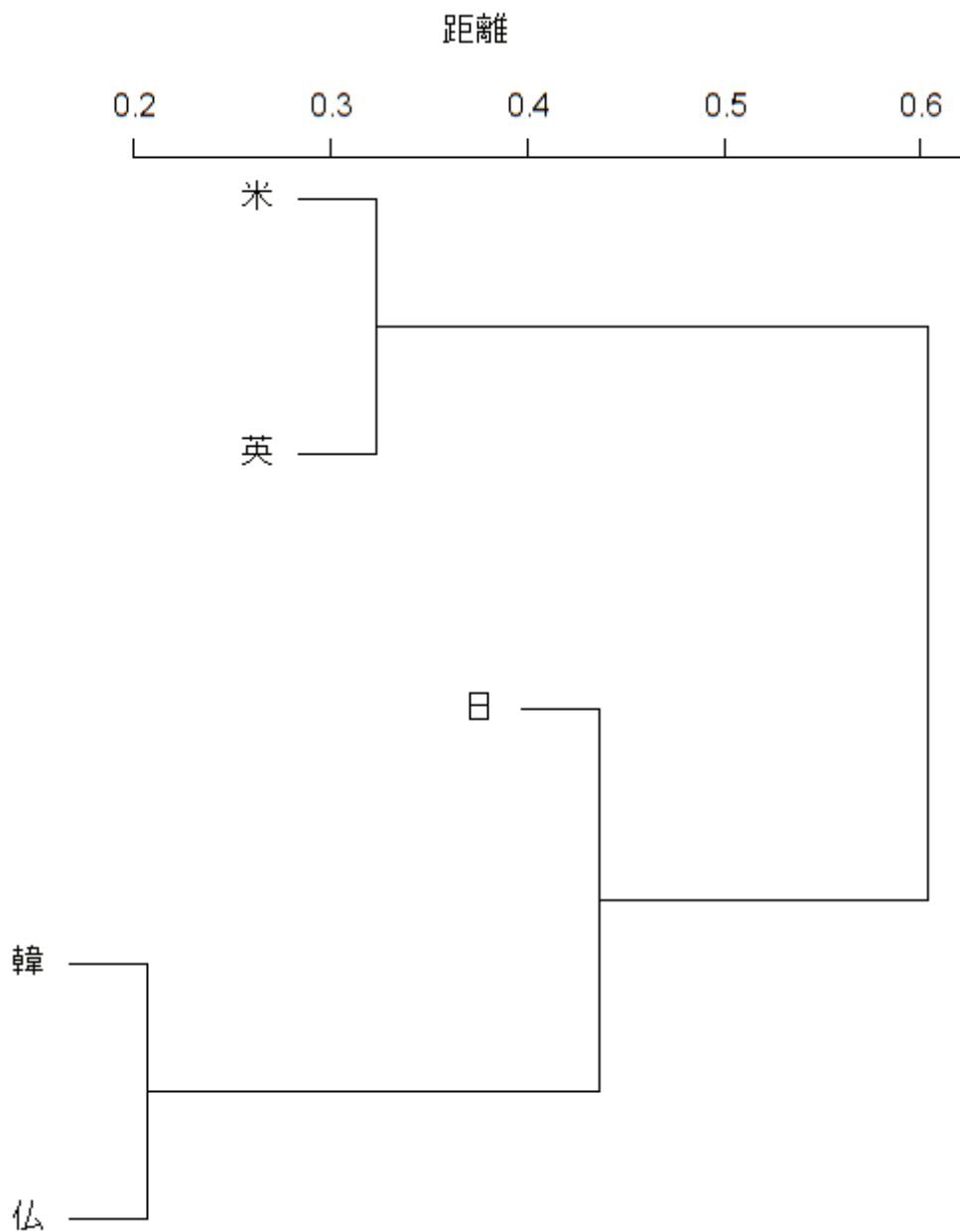


図3 第20問（職業選択の重視点）の5か国回答に対するクラスター分析によるデンドログラム

ただし、得られなかったのはこの調査で収集されている、学校観や職業観として一般に問われるような範囲においてということであり、特異性がどこにも存在しないことが立証されたわけではない。また、クラスター分析の性質上、他のさまざまな国々からの同様のデータを加えていった場合にも、本研究が取り上げた5か国が同じ関係性を保持することが保証されるわけではない。これらに留意しつつ、これから行われる第9回調査も含め、今後もさまざまな実証データを通して検証を進めることが求められよう。

また、このような研究では、日本の位置づけだけに注目しなければならない理由はない。他の国々との間に関係に関心を向ける研究もまた、あってよいであろう。ただし、本研究の結果は、日本のみが離れて孤立するという仮説を否定はするものの、分析間で一貫した関係性を見

出すことは難しい。そのため、Romesburg (2004) が挙げているような、仮説検証的なクラスター分析での否定的知見から新たな仮説を導出する発展には届かなかった。これに対しての今後のアプローチとしては、個々のパターンが各国間のどのような社会文化的類似性に由来するのかを検討するという方向性を考えることができるだろう。

#### 引用文献

- 花野雄太 (2013). 「偉くなりたい」高校生9% 朝日新聞 3月28日朝刊
- 原田曜平 (2012). 若者消費論 JOYO ARC, 2012年11月号, 6-15.
- Romesburg, H. C. (2004). *Cluster analysis for researchers*. NC: Lulu Press.
- 柳田國男 (1938). 木綿以前の事 創元社
- 吉本圭一 (1996). 日本青年の労働観 青少年問題, 43 (2), 28-35.